

『うさぎとなかよし大作戦！』からいのちを大切にすることに

生活 第1学年

七尾市立徳田小学校・教諭

1 事例の概要

今、いじめや自殺など、自他のいのちを軽んじるような悲しい事件が後を絶たない。そんな中で、生活科の内容項目「⑦動植物の飼育・栽培」の動物を飼育する体験は、いのちを直接扱う意義のある内容であると考え。本校の児童の意識調査や保護者のアンケートからも、豊かな自然環境に囲まれているものの、動植物にふれあう経験のある児童は少ないことが実態として把握できた。

そこで、豊かな体験を通してかけがえのないいのちを大切にすることをねらい、本実践に取り組んだ。その中で、児童一人ひとりの思いや願いを大切にしたい指導についても探っていった。

A-1 意識調査

2 実践内容

(1) 単元の目標

小動物に関心を持ち、うさぎと親しみながらふれあう体験を通して、自分なりに感じたり考えたりしたことを絵や文で表現することができるとともに、うさぎの特性に気づき、自分と同じように生きていることに気付くことができる。

(2) 指導上の工夫点（視点）

① 地域や児童等の実態を生かし、2年間を見通した指導計画の作成

- ・ 『いのちに関する意識アンケート』を行い、事前に児童の興味・関心・経験の有無などの傾向を把握した。その後、学年テーマの設定とめざす子ども像の明確化を図った。
- ・ 『いのちの年間指導計画』を作成し、各教科・道徳・特別活動の体験活動に関連性を持たせることによって、事前と事後の活動のつながりを意識して指導できるようにした。
- ・ 『いのちに関する体験活動といのちの視点』の全体計画を作成し体験活動をいのちの5つの視点に位置付けた。一つの視点に偏ることなく、いのちの大切さを実感できるようにした。

② 気づきを大切にしたい指導方法の工夫

- ・ 児童が主体的に活動できるように時間・空間・仲間などの学習環境のデザインを工夫することで、児童に豊かな気づきが生まれるようにした。
- ・ 飼育・観察、調べる、ふれあうなどの多様な学習活動を授業だけでなく、学校生活の様々な場面でも行い、対象とゆったり関わることができるよう配慮した。児童が気づきを共有し合いながら、思いや願いの実現を図るようにした。
- ・ 獣医師会との連携を図り、専門的な立場からの支援によって、いのちをより実感的に捉えることができ、学びを豊かなものにできるようにした。

③ 指導に生きる評価と支援

- ・ 児童の具体的な見取る姿をイメージし、事前にどんな場面でどんな姿を見取るのかを予想しておくことで、それらを指導に生かすようにした。
- ・ 短期的・長期的な見取りから、一人ひとりの変容を適切に見取るようにした。
- ・ 一側面からだけの評価方法にならないように、多様な評価方法から一人ひとりの学びを多面的に見取るように工夫した。

B-1 年間指導計画

B-2 いのちの視点と全体計画

B-3 見取る姿のイメージ

3 指導の実際（略案）

学 習 活 動 （ 児 童 の 様 子 ）	◇ 評 価 ◎ 支 援
1. 本時のめあてをつかむ。 もっと なかよし大きくせん！をしよう 2. グループに分かれて、ふれあう活動をする。 「自分たちでつくったレストラン、遊び場、おうちに入ってもらえるかな。」 「こまったことがあったら、じゅういさんに聞こう。」 3. 活動について、みんなで話し合う。 「うさぎのしんぞうの音は、わたしのよりもはやい。」 「トントントン…って、たいこみたいだ。」 4. 獣医さんからの話を聞く。	◎自分のしたいことや約束について確認する。 ◇うさぎが自分と同じように生きていることに気付いている。 （行動観察、つぶやき） ◎諸感覚を通して感じたことを認め、満足感や充実感につながるようにする。 ◎生きているということや命の大切さについてのメッセージを伝えてもらう。

C-1 指導案

C-2 学習環境と表現方法の工夫

C-3 獣医師会との連携

4 成果と課題

(1) 成果

① 地域や児童等の実態を生かし、2年間を見通した指導計画の作成

児童の興味・関心、経験、生活の様子などの実態を把握したことで、よりねらいに迫る体験活動を充実させることができた。また年間指導計画を作成したことは、教師の見通しを持った指導をする上で、たいへん有効であった。特に、教育活動全体における「いのちの指導」の関連性ある意図的な計画ができたことで、指導の継続・発展も可能となった。

さらに「いのちの視点」の位置づけに関しては、児童に学ばせたい視点を絞った活動計画ができ、幅広い体験活動に取り組むことができた。

② 気付きを大切にす指導方法の工夫

時間・空間・仲間の工夫をしながら意図的・計画的に学習環境を構成する中で、児童が生き生きと活動し、豊かな気付きが生まれていった。また、飼育・観察・調べる・遊ぶ・ふれあう・つくるなどの様々な学習活動を取り入れたことで、うさぎへの関心・意欲を持続させることができた。さらに獣医師会からの指導や支援を受けながら、いのちある生きものに対するやさしさと思いやりの心を育てることができた。そして、そこで生まれた知的な気付きや感動が、いのちの感性を育む大きな財産になった。

③ 指導に生きる評価と支援

どんな場面でどのような言動を見取るのかという、児童の具体的な見取る姿を数多くイメージしておくことは、指導と評価を一体化させ、指導の充実・改善を図る上で重要であった。また評価情報の収集の仕方を工夫し、多様な評価方法で多面的に見取ったことにより、児童一人ひとりの学びを適切に見取ることができた。

(2) 課題

『限りあるいのち』の視点についての指導は、不十分であった。今後、大切な学びの場として段階的な指導をする必要がある。また、日頃から児童の小さなつぶやきや気付きを見逃すことなく、教師の適切な働きかけができれば、さらに学びを広げたり、次の学習に大きく生きていくものだと思われる。今後は、どんな場面でどのような言葉かけをすべきかということについての効果的な指導が課題であると再認識した。そして、一人ひとりの見取りをどのように生かしていけば、さらに学びを発展させていくことができるのかといった効果的な指導と評価の在り方についても研究をする必要があると実感した。